

4・日野原重明『生き方上手』好調で、「老後本」が続出

高齢化社会がますます進むなか、老いをテーマとした――『老後本』が読者の共感を得た。なかでも聖路加国際病院理事長・名誉院長日野原重明氏の著書が数多く刊行され、人物ともども話題となった。『日野原コーナー』を設ける書店もあった。

先鞭をつけたのが、その日野原氏の著書『生き方上手』（ユーリーク）で、「90歳を越えた医師からあなたへの贈りもの」というのが帯の言葉。医師としての体験をもとに書かれた本書は、昨年12月、初刷1万部でスタート。今年に入ってジワジワと部数を伸ばし、本誌調査では6月にベストワンとなった。

日野原氏は50代をターゲットに書いたというが、12歳から101歳までの読者から感想が寄せられるなど幅広い読者に迎えられた。

この『生き方上手』のベストセラ―化とともに日野原氏の著書は新装版、文庫本、CDブック、対談などを含め続々と刊行された。ライオン

ップをあげると、『いのちを創る』（講談社+α文庫）『人生百年私の工夫』（幻冬舎）『新装版老いを創める』（朝日新聞社）『新版豊かに老いを生きる』（春秋社）『生きかたの選択』（河出書房新社）『いのちの言葉』（春秋社）『いのち、生ききる』（瀬戸内寂聴との対談、光文社）『生きるのが楽しくなる15の習慣』（講談社）『新装版死をどう生きたか』（中央公論新社）『病人でこそ知る老いてこそ始まる』（高野悦子との対談、岩波書店）等々。

また、石原慎太郎『老いてこそ人生』（幻冬舎）が著者のイメージとのミスマッチもあつてか売上げを伸ばした。7～9月期は『生き方上手』とともにベスト1、2位を占めた。

意外なところでは吉本隆明『老いの流儀』（光文社）。また永六輔『生き方、六輔の。』（飛鳥新社）が10月に刊行され好調な売行きを示した。

